



大学入学共通テストの実施方針公表



大学入試センター試験にかわって 2020 年度から始まる「大学入学共通テスト(仮称)」の実施方針が先日、公開されました。まもなく正式決定する予定の新テストは、記述式が導入されたり、民間の資格・検定試験を活用するなど…。おもな変更点は右の通りです。

大学入試改革案のポイント

- 大学入試センター試験を衣替える新テストの仮称は「大学入学共通テスト」
- 英語は2020年度から民間検定試験に全面移行するA案か、23年度まで共通テストも併用するB案のどちらか
- 共通テストの国語で80~120字、数学で数式などを書かせる記述式問題を出す
- 推薦入試やAO入試でも学力評価を義務付ける

5/17(水) 福井新聞より

同時に、国語の記述式問題のモデル問題例を公表しました。

「架空の行政機関の広報資料」

「駐車場の契約書」

という二つの題材をあけて、資料を読み取る力、状況に応じた思考力、表現力などを問う形式の出題となっています。

大学入試センターのホームページでモデル問題をみることができます。問題を見ると、いろいろと思うことがあるでしょう。ぜひ一度、ご覧になってください。

第2回PT会議より

研修【教科横断型授業について考える!】

第2回 PT 会議には、今回もメンバー以外に谷口典先生・齋藤先生・天谷先生に参加していただきました。研修会では2グループに分かれ、教科横断型の授業のアイデアを出し合いました。今後、実践を目指して研究を進めていく予定です。



物理の「熱機関」を取り扱う授業に、世界史の「産業革命」の解説を加えることで、熱機関の原理について深めることができるか。

地学の環境問題の分野「砂漠化」「温暖化」の授業に、現代社会をコラボすることで、環境問題が及ぼす社会的影響についてより理解を深めることができるのではないか。

生物で扱う遺伝子操作については、化学物質が必ず関わってくるので、化学との連携が考えられる。さらに遺伝子組み換えの食品という観点から、家庭科の内容ともつながっていきそう。

ひとりごと 当初、新テストは「年複数回実施」「段階別表示」など多くのことが掲げられましたが、今回の公表では、比較的現実的な改革にとどまったといえます。それでも、言語活動を重視した授業が今後ますます重視されることは間違いありません。本校でも多くの先生方が、ICT 機器を利用したり、グループ討議をとりいれるなど、様々な工夫をされているようです。

さまざまな問題点や、不明なことも多々ありますが、知識偏重の入試から脱却し、読解力や思考力・表現力を問うこと、英語においては「読む」「聞く」だけではなく「話す」「書く」を加えた総合的な英語力を求めていることは間違いのないようです。それをふまえた授業研究が、わたしたちのチームの急務であることあらためて実感しました。

授業実践報告

「ちょっとだけActiveな授業」

今川大輔 教諭 2年3組 「数学II」

予習してきた問題をグループでもちよって話し合い、解答・解説を考えて板書し、クラスの生徒に解説するという形式の授業を実践しています。單元ごとの演習の際に、この形式を毎回とりいれているそうです。解答のポイントや考え方を説明させ、教員が適宜つつこみをいれることでとりこぼしを補っているとのこと。グループでの話し合いも思った以上に活発で、生徒たちは生き生きと活動しているようです。

「生徒が教壇に立つ古文の授業」

前川法央 教諭 3年9組 「古文」

古文を現代語訳するという授業を、生徒に教壇に立たせて説明させようというところ。3年にもなると人間関係もできあがっており、とても和やかな雰囲気の中で授業がすすんでいました。能力の高い生徒、教育学部を志望している生徒など、生徒の個性が発揮され、教室内の空気のやわらぎ、生き生きとした授業になるそうです。途中、教師役の生徒が前川先生をあてる場面もありましたが、安心してください。しっかり答えることができていました。